

津島佑子×ウラ・ハーン 日独女性作家対談 職業としての文学～私が伝えたかったこと～

日本とドイツ異なる国で精力的に作家活動が続けるお二人の対談が、ドイツ・日本研究所所長のイルメラ・日地谷-キルシュネライトさんのコーディネートで実現しました。「作品を通じた自己認識」や「職業としての文学」など、さまざまなテーマに話題は発展。お二人の職業作家としてのプロ意識に触れた素晴らしいディスカッションとなりました。

日時：平成14年7月3日（水） 18:30～20:30
主催：ドイツ・日本研究所、女性と仕事の未来館



イルメラ・日地谷-キルシュネライト

ドイツ文学、コミュニケーション学、社会学、日本学、中国学等を専攻し、博士号を取得。ポッフム大学、一橋大学、トリア大学、ベルリン自由大学で教え、1996年から現職。ドイツ連邦功勞十字勲章(1995)、ドイツ學術振興会ザイボルト賞(2001)他を受賞。日本の文化、社会に関する日・独・英文の編・著書多数。

自伝的要素を昇華し
普遍的な広がりを持つお二人の作品

●作品の中の自伝的要素

日地谷 作品の中から読者が自伝的な要素というのを読みとったら、拒絶しますか。それとも特別な関係が生まれると思いますか。

ハーン 自伝的な作品は、つい最近発表した『隠されたことば』が初めてです。自分が考えついたものと体験とをつなぎ合わせて、二つのものが不可分になっていく過程が、非常に面白かったです。虚構の中でも、人物はいきいきと生きており、読者が読むときに「私の中ではどうだったか」と考えてくださるんですね。

津島 小説を書くということは、作者も自分が体験したことを客観的にふり返りながら、その普遍的意味合いを発見していく過程だと思えます。読者自身も作品から意味を見出していくという、新しい何かをつかむ行為があります。「これはあなたのことですか」と聞かれて違うこともありますが、不愉快に思うかということ、覚悟の上というか、現実的に見えるんだなと喜んでいきます。

●表現することによる解放

日地谷 お二人は読者と積極的に関わりますか、それとも距離をおかれますか。読者からの反応は作品に影響を及ぼしますか。

ハーン 読者の反応は数多くありましたが、物理的に読者と関わるのは無理でした。朗読会をする際に、質疑応答などをして対話します。そこから私の知識が広がるのですが、それに影響されることはありません。

津島 印象に残っているのは、私が子どもを失ったときに、小説

を書けなくなり、ようやく書き始めても子どものことしか書けなかった時期のことです。書くことによって子どもの死をどのように乗り越えるかということを考えるために、こつこつと小説を書きました。実際に子どもを亡くされたお母様などから多くのお手紙をいただいて励まされる思いがしました。実際に小説を書くというのは孤独な営みだと思えますが、時々読者の方と触れ合って励まされるのはとても嬉しいです。

ハーン 読者に訴えたいことは本の中で書いています。何かの疑問を抱いたときは作品の中で見出していただくということになります。言語で表現するときには、痛みや苦しみを経験して、表現することによって解放される面があります。読者の側は読むことで再確認して慰められる面があるかと思えます。

●職業としての文学

日地谷 生活と書くことの間にはどのような関係がありますか。

津島 私は小説の他にも文芸評などいろいろな仕事をしています。プロフェッショナルな作家というのは、注文を受けたとき、内的な動機がなくても書けなくてははいけません。いつでもある程度の技術を発揮できるような状態にしておけるか、というのが作家として生きる為に必要なことでしょう。

ハーン 生活と書くことの間には矛盾を感じることもあります。しかし職業作家ですからいつでもきちんとして書けなくてははいけません。書くことは職人芸のようなものなので、テクニックを磨く努力を



津島佑子

作家太宰治の娘として東京に生まれる。大学在学中から小説を書き、20代前半に新しい書き手として注目をあび、短編集『謝肉祭』を出版。以降多くの作品を発表し、泉鏡花賞(1977)、女流文学賞(1978)他、数多くの文学賞を受賞。作品：『寵児』(1978)、『火の山—山猿記』(1998)、『笑いオオカミ』(2000) 他

社会や時代が違っても
分かってもらえるものを書きたい

ポ ー ト

怠ってはいけませんね。

●書くことにより時代をつかむ

日地谷 古い作品を読んだときに、自分でどのような気持ちを持たれますか。

津島 小説を書くのは「私が理解したいから」というのが一番の動



ウラ・ハーン

文学、歴史、社会学を専攻し、学位取得。ハンブルグ、ブレーメン、オルデンブルグの三大学に非常勤講師として勤める。1979年から1989年までブレーメン・ラジオ放送の文学番組編集員。作品：『女のいえに男がひとり』（同学社 1996年・ドイツ語原作1991年発表）、『隠されたことば』（自伝、2001年発表。未訳） 他

書くことは職人芸のようなもの
努力を怠らず、「愛をもって」書く

機で、例えば自分の母親を理解したいと思ったときに、小説の中で母親像を書いたりします。若いときの、母親をモデルにした小説から、別の小説では30年近くの時間がたっています。だから別のことがかかるということはありません。ただ、だからといって昔の作品を「浅かった」とは思いません。文章で表現すると不思議なことに、母の人物像を通して、その時代をつかもうとする行為になります。だから本質は変わらないのです。

ハーン 作家というものは個人的な体験なしには作品は生まれません。私の場合には、体験が書くことへの動機になっています。私が30年前に書いた詩は、まるで妹が書いたような気がします。当時にしか書けなかったものです。

津島 現実的には女性作家は年をとるのが難しいと感じますが、テーマとしては時間を超越している面があります。日本の社会の常識が崩れさっても、分かってもらえるようなものを書きたいと思っています。

ハーン 100年後に何が伝わるかと考えます。私が書くことによって、何が良くなるか悪くなるかということも考えるわけです。「愛をもって」というのが私の書く行為で重要なことです。

『基礎から学ぶ起業マニュアル』出版記念シンポジウム&交流会 「自分らしい起業スタイルを見つけよう」

未来館では開館以来、女性の起業活動支援に力を入れています。4月20日には、これまでのセミナーで蓄積された起業のノウハウをまとめた『基礎から学ぶ起業マニュアル』を発刊しました。これを記念して開催したシンポジウムには、起業に挑戦しようとする多くの女性たちが集まり、熱気にあふれました。

日時：平成14年7月5日(金) シンポジウム 14:00～17:30
交流会 17:30～18:30



盛大に行われた交流会

第1部 パネルディスカッション「活躍する起業家たち」

軽い気持ちで始めたというものの、1973年の創立以来、国内外で活躍の場を広げる篠原欣子さん。一方、綿密な準備を重ねた上で起業し、設立初年度ながら黒字決算を達成した市川孝之さん。日本ベンチャー学会事務局長の田村真理子さんによる巧みなコーディネートで、事業を維持・拡大するヒントが満載のディスカッションとなりました。



自らの経験をヒントに創る—— 篠原欣子 (テンプスタッフ株式会社代表取締役)

オーストラリアで秘書として働いていた時に派遣制度を知った篠原さん。社員が休むと、代わりの人材が来て仕事を片づけていく派遣システムに感動。帰国後、日本では知られていない人材派遣業を「あれば便利なのに」と思い、起業。貯金100万円を

資金に人材派遣業を開始。しかし、「最初の2、3年はやめたくて仕方がなかった」という。「やめるのは明日にして、今日は頑張ろう」と自分に言い聞かせて5年目、ついに黒字へ転換。現在は、国内92ヶ所、海外7ヶ所に拠点を構える大企業へと成長した。常に市場の要請に応えるサービスを次々とスタート。意識的に分社化も行い、起業家育成にも積極的に取り組んでいる。「今後は、社会貢献を考えた会社づくりをしていきたい」



仕事はルールのある遊び——市川孝之（シーズウェイ株式会社代表取締役）

「とにかく働くことが好き」と言いきる。会社の最寄駅から職場まで、ポストというポストにはすべてチラシを入れ、足繁く通った。初年度に1億円の売上を計上し、今年度は130%アップの見込みだという。「数字は後からついてくる」が信条で、「お客様に迷惑

をかけず、プロとして会社の発展に貢献する」ことを徹底。一見非効率に見えることでも、まずは挑戦。しかし、失敗した時には誠心誠意謝り、「お客様のリスクを軽減すべく、いかに自分が動くか」を即座に考える。新しい生きた情報を入手するため、わからないことは臆せず質問し、「とにかく人とよく話す」。「これからは、情報化時代に基づいたカスタマー・コミュニケーション・システム（CCS）の開発に力を注ぎたい」

第2部 公開相談室

『基礎から学ぶ起業マニュアル』の作成にご協力いただいた先生方をお招きして、会場の参加者から寄せられたさまざまなご質問・ご相談にお答えいただきました。

事業計画書は開業後の経営をも左右する



村上義昭
(国民生活金融公庫総合研究所主任研究員)

事業計画書は、開業までのハードルを一つひとつ認識して乗り越えていくため、他の人に見せて協力者を得るため、そして開業後の経営をチェックして計画と現実とのギャップを埋めていくために必要。

人を「求めて・育てて・活かす」



大槻哲也
(全国社会保険労務士会連合会会長)

労務管理で必要なのは「働きやすい職場環境」をつくること。人材をうまく活用することで企業はきびしい戦いに勝負できる。開業後の顧客開拓は、積極的に人のネットワークに入っていくことが鍵。

事業を起こす時には大胆に



田村真理子
(日本ベンチャー学会事務局長)

女性の起業は圧倒的にサービス業が多い。今までの産業界では効率が悪いために商品化されなかったサービスに目を向け、事業を起こすしなやかさが女性にはある。行動力と大胆さで、思いを事業につなげてほしい。

ポイントは「戦略+コミュニケーション力+ネットワーク」



コーディネーター：樋口恵子
(女性と仕事の未来館館長)

志を持つこと。しかし思いだけでは起業はできない。開業前の準備を綿密に行い、戦略を持ちながら、思いを伝える方法論と行動力に人と人のネットワーク力をプラスして最大限に駆使することが大切。

公開相談室で寄せられた質問

- 飲食店を始める際の物件の探し方
- 女性の感性を活かしたビジネスは成功するか
- 金融機関で厳しい融資担当者にあたった場合の乗り切り術
- 助成金制度や公的制度をスムーズに受けるコツ
- 個人事業主から会社へ変更するベストタイミング
- 顧客開拓のノウハウと、準備すべき運転資金の額
- 起業家の家庭と仕事との両立のコツ、自分の時間・パートナーや子供との時間・リフレッシュの時間をつくりだす工夫
- 環境に優しく、女性や男性、お年よりや外国の方とも地域で楽しくでき、喜ばれるビジネスのアイデア
- 長く定着する人材の育て方・伸ばし方